曲目解説

今回のプログラムはいずれも劇的な要素の強いものが並んでいる。楽劇（歌劇）、劇音楽、交響詩といった具合である。しかし、作曲家の出身は、ドイツ、チェコ、ロシア、フランスと様々で、またさらにその作曲家の個性も際立っている。

「マイスタージンガー」前奏曲は、解説の必要もないほど有名な曲であり、演奏会でもしばしば取り上げられる正に名曲中の名曲であろう。全曲を聞いたことのない方でも、冒頭の、いかにもドイツ音楽らしいフレーズを一度は耳にしたことがあると思う。堂々としたその開始から実に緻密に構成され、変化とともに、まとまりも良く、その演奏回数の多さもうなずける。特に中間部で、それまで出た三つの旋律が対位法的に絡み合う部分は、すばらしい効果をあげている。

交響詩「野鳩」は、ドヴォルザークが、故郷ボヘミアの民話に基づいて作曲した５曲の交響詩の一つである。ボヘミアの高名な詩人・民俗学者のエルベンの民俗詩集「花束」に霊感を受けて作曲されたものである。「野鳩」は、次のような筋立てになっている。村の若い未亡人が、自分で毒殺した夫の棺に偽りの涙を流しながら葬送の列に従う。やがて、彼女の顔は明るい表情に変わる。若いハンサムな男が喪服の脱いで結婚してくれと言い寄ったからである。婚礼の祝宴がにぎやかに催される。しかし、彼女は犯した罪の報いを受けねばならなかった。先夫の墓に一本の樫の木が育ち、そこへ一羽の鳩が飛んできて悲しげに鳴く。女の魂は、その鳴き声に引き裂かれ、良心の呵責に耐えかねて自ら命を絶つ。そして、曲は二つの魂の和解によって閉じられる。

幻想序曲「ロメオとジュリエット」は、それ自体が、一つの劇のようである。交響詩とは銘打たれてはいないが、その領域にも大変近いものがある。ただし、ストーリーを音楽で表現したものとなっているのではなく、その雰囲気を、音楽的に構成された中で十二分に発揮しているのである。曲は、いずれも印象的で一度聴いたら忘れられない三つの旋律で構成されている。特に二人の愛を表した、中間部のメロディはいかにもチャイコフスキーらしい素晴らしいものである。

「アルルの女」は、アルフォンス・ドーデーの短編集「風車小屋だより」の中の一つである。それは、後に戯曲化され、ビゼーはその劇のために２７曲の音楽を作曲した。１８７２年の初演は、不成功だったが（１３年後の再演では大成功であったが、ビゼーはその時すでにこの世を去っていた）、ビゼーは自分の音楽には自信を持っていて、その中から４曲を選び、演奏会用の組曲にした。それが第１組曲である。彼の死後、親友のギローが、その他の曲の中から４曲選び出し、第２組曲としたのである。（ただし、最も有名な「メヌエット」は、ビゼーの歌劇「美しきパースの娘」からの転用である。）